

論文概要書

歌物語史から見た伊勢物語

宮谷
聡美

本論文は、定家本（天福本）にもとづいて『伊勢物語』の表現から主題と形成の様相を読み解くとともに、和歌と散文の関係に注目し、歌物語という視点から文学史を構想しようとした試みである。

すなわち、『伊勢物語』が和歌や漢文学、歌謡などとの交渉の中から生まれたこと、また、一時期の所産と言われる歌物語が、それ以後の文学の中にかたちを変えて取り込まれ、長編物語成立のために一定の役割を果たしたことについての考察である。

第一部 『伊勢物語』の主題と形成

第一章 「よむ」歌と「こふ」歌

第一章の総論で、まず『伊勢物語』全体の大まかな傾向からうかがえる、和歌に対する意識について考察した。「よむ」という言葉は、『古今集』と関係が深く、披講に値する歌に用いたとされる。しかし、『伊勢物語』の中では、逍遙、宴、賀などの公的な晴の歌に用いられるだけでなく、本来「いふ」が用いられても不思議ではない、私的な主題の物語においても、他者と心を通い合わせる力を持つ秀歌に用いられている。一方で、心を通い合わせるできない歌には「いふ」が用いられており、『伊勢物語』においては歌が散文の表現と緊密に結びつき、歌物語と言われる独自の形態を成している。

第二章 『伊勢物語』と和歌・漢文学

第二章では、第一節から第六節で、代表的な章段のいくつかをとりあげ、おもに『万葉集』や『古今集』等の歌集や漢文学など、『伊勢物語』以外のテキストとの比較を通して読み取れる『伊勢物語』の特徴をあぶり出すことに努めた。第一節でとりあげた、六段「芥河」、第二節でとりあげた二十三段「筒井筒」には『伊勢物語』以前の和歌の伝統がふまえられている。第三節でとりあげた六十三段「つくも髪」、第四節でとりあげた六十九段「狩の使」は中国文学を下敷きにしているが、同時に『万葉集』以来の和歌の伝統が活かされており、独自の達成を見せている。第五節でとりあげた八十七段「蘆屋の里」では『万葉集』所載歌の類歌、第六節でとりあげた百七段「涙河と身を知る雨」では、業平周辺の歌人たちによる『古今集』との重載歌が物語内で重要な位置を占めており、『古今集』成立以前の和歌や『古今集』重載歌を活かした物語創作方法の特徴を見ることができるといえる。

第一節 芥河―「白玉か」の歌をめぐる―

六段の「白玉か」歌は、『万葉集』的な「恋死に」の歌の発想に、同じく『万葉集』に多い「問ひし（人）はも」という、今はいない人を思う類型表現を持ち込んだものであると見られる。さらに、異本章段「清和井の水」の歌とも類似するが、「白玉か」歌がこれらと一線を画すのは「問ひし人」ではなく「問ひし時」となっていることである。これによって、白玉をめぐる二人の間に交わされた会話と、コミュニケーションを取ることができないまま女を失った男の悲嘆が焦点化され、物語の具体的な文脈と切り離すことのできない歌となったものである。本章段の歌は『新撰和歌』にしか類歌が見られないことから、その成立は『新撰和歌』後であると見る見解も多かった。しかし、『万葉集』に多く見られるような伝承歌をもとに、物語に合わせて「問ひし時」という表現が選び取られ創作された歌であったとみる方が蓋然性が高く、『新撰和歌』成立以前に「芥河」が成立してい

た可能性もあるのではないかと考えられる。

第二節 筒井筒—歌の類型と物語のねじれ—

二十三段の大和の女の歌は、『万葉集』にも見られる、旅中の夫を思う「留守の歌」の類型に則ったもので、来訪の途絶えた男を「待つ」歌ではない。一方、高安の女の歌こそが男を「待つ」女の歌の類型に則った歌であったが、男に伝わったはずの後者が独詠として描かれ、独詠であった前者の歌が男に立ち聞きされることとともに、両者の役割が組み替えられている。更に、本来「待つ」歌にふさわしい「歌徳物語」を大和の女の物語とすることで、特殊な形態の物語になっている。高安の女の後日譚があることで不安定な構成になっていると指摘されてきた本章段の特徴は、歌の組み替えによるものと見られる。

第三節 つくも髪「あはれ」と業平

六十三段は、『古今集』に見られる宇治の橋姫の話と、宋玉「登徒子好色賦」をもとにした『万葉集』の石川女郎と大伴田主の「みやびを問答」をもとに創作されたものと考えられる。歳を取っても少女のような恋心を抱いて、あえて身をやつし、積極的な行動に出るつくも髪の方は、宋玉と同様に「体貌閑麗」と評された業平を彷彿とさせる「在五中将」に見合う美人であり、段末の評語「けじめ見せぬ心」は気おけない男性仲間たちによる業平へのからかいと見ることができる。また、本章段に登場する「あはれ」という価値観は、長編物語へと続くものとして重要である。

第四節 狩の使—歌物語の達成—

六十九段「狩の使」は『古今集』のよみ人知らずと業平の贈答歌を中心にした物語として有名である。従来、唐代艶情小説の『鶯鶯伝』の翻案であり、『遊仙窟』との共通点が多いこと等が指摘されてきたが、漢籍の影響は物語の前半に限定的に見られるものである。「狩の使」の後半は、万葉後期の官人に対する遊行女婦、娘子らの送別歌や、かはらけ（食器）に歌を書いて贈る歌の伝統をふまえたものとなっている。つまり、この物語は漢籍の知識と和歌の伝統を融合させ、男女の心の交流を主題とする、独自の達成を遂げている。

第五節 蘆屋の里—物語の主題と方法—

八十七段は、土地の女の純朴な心、布引の滝の飛沫、光る漁り火、わたつうみが本来持っているはずのものという、隠れたキーワード「白玉」によって四場面の関連を保つ構成方法となっている。都の官人と純粋な心を持った土地の女の恋を主題とする『万葉集』類歌の改変歌をこの土地の伝承歌と紹介して恋物語を期待させ、不遇を主題とする衛府督の歌に弟の機知的な歌を対比させることで、布引の滝を前にした感動を皆で共有する歌の理想を提示するなど、創作意欲に満ちた旅の物語である。

第六節 涙河と身を知る雨—物語と歌—

百七段は、『古今集』によれば業平らしい男が、藤原敏行から、自分のもとにいる若い女宛に来た手紙への返事の歌を代作するという物語である。実際は男の代作歌であり、本来は異なる場面で詠まれる種類の歌であるにもかかわらず、敏行はこれらの歌をありがたがり、雨に濡れながらやってくるのが戯画的に描かれている。女歌の規範とされる名歌をめぐり、場面や文脈によって意味が変わる、和歌の不確実性を問題提起しているとも読める。在原業平作である可能性も考えられる。

第三章 『伊勢物語』と歌謡

第三章では、『伊勢物語』の歌謡的な側面に注目した。『伊勢物語』においては、和歌・漢文学だけでなく、歌謡からの影響も無視することができない。また、翁は複数の章段にわたって登場し、『伊勢物語』の特徴の一つとなっているが、多くは『伊勢物語』後半に登場することから、男の年老いた姿であると漠然と理解されることもあり、その役割についてはなお解明されていない点が多い。そこで、ここでは翁に伴う官職表記をたどりつつ、芸謡を司る翁のかたちづくるイメージを探った。

第一節 梅の花笠―敏行と歌謡―

百二十一段は「梅の花笠」をモチーフとする物語である。このモチーフは『古今集』巻二十所載歌や春上の源常歌等に見ることく、仁明朝から長く人々に愛好されたものである。『伊勢物語』の中では珍しく宮中が舞台となっており、梅壺という場と雨が降っている状況とが設定され、即興的に歌われた歌の応酬が描かれている。このような物語の成立にかかわった可能性のある人物として藤原敏行を考えることもできそうである。

第二節 翁―東歌とのかかわり―

翁には「老年の男性」のほか、「芸謡を司る人」の意があり、『伊勢物語』では、八十一段の「かたる翁」がこの意味に近く、原型とみられる。しかし、それ以外の章段の「翁」には在原業平の歴任した官職表記を伴う。近衛中将は神社歌を奉仕し、儀礼や宴席で歌う歌によって、芸謡の翁が担っていた嘆老歌を貴族社会の賀歌へ繋ぐ役割を果たす等、歌舞に秀でていたとされる。また、馬の頭は天皇に近侍する官職である。これらの官職に伴うイメージは、単に業平が歴任したという事実の反映に留まらず、物語のイメージを形象する重要な要素であると考えられる。

第二部 歌物語の文学史

第一章 『伊勢物語』長編化の方法

第一章では、歌物語としての『伊勢物語』の要素が、『伊勢物語』以降の文学にどのように引き継がれていったかの種々相を見る。まず第一節から第三節まで、『伊勢物語』のさまざまなタイプの物語の中から、短編章段や長編物語の萌芽が見られる章段について検討する。いわば、『伊勢物語』の内部に文学史をたどる試みである。そのうえで、第四節では、歌物語的歌集と呼ばれる『一条撰政御集』冒頭部『とよかげ』を、『平中物語』と比較しながら検討し、『伊勢物語』がどのように捉え返されて後の文学に受け継がれていったのか、考察する。

第一節 短編章段―離別の物語―

三代集、平安前期の私家集や『大和物語』『落窪物語』等を見ると、餞別の品として装束を贈ることは一般的であるが、離別歌に「裳」を詠み込むことは一般的とは言えない。「喪なく」は『万葉集』にある表現であるが、これを餞別の品の「裳」と掛けたところに『伊勢物語』四十四段の新味がある。四十八段の物語は、共通歌の『古今集』詞書より簡略で、離別の悲哀に焦点を絞っている。『伊勢物語』の離別物語は、物語の展開よりも歌と人物の心理に焦点を合わせた短編物語となっているのである。

第二節 時間が引き延ばされた物語と歌の連続による物語

―「天の逆手」「おのが世々」―

歌物語は、歌によつて物語が急転し、人間関係の葛藤が解決するために短編性を特色とするとされる。しかし、『伊勢物語』には、「書き置いた歌」によつて、歌の詠み手と受け手との間に時間的なずれ違いを用意する二十一段や九十六段のような方法と、贈答歌の連続それ自体によつて物語を進行させる二十一・五十段・七十五段のような方法とがあり、歌徳的な内容に飽き足らず、物語を長編化させた試みとして評価できる。後者は『平中物語』にも踏襲されるもので、『伊勢物語』以後の文学史と重なる面がある。

第三節 物語の長編性―「在原なりける男」―

『伊勢物語』六十五段においては、「泣く」「歌う」などで提示される独詠歌が描かれることに特徴があるが、歌が事態を好転させることはなく、「歌物語」的要素は薄い。物語が歌物語の形式を抜け出すためには、中心になる場面の前後に広がる空間や時間、会話、社会等が描かれることが必要であることがこれまでも指摘されてきたが、その中でも特に、指示語により登場人物の同一性が確保され、物語が連続することによつて、錯綜する「時間」と「社会」が描かれ、『伊勢物語』のなかでは長編物語と言える要素に満ちていることを述べる。

第四節 『伊勢物語』のふまえ方―『とよかげ』の「あはれ」―

物語的歌集として知られる『一条摂政御集』冒頭部『とよかげ』と『平中物語』は共に『伊勢物語』を受け継いでいる。しかし、『平中物語』が男の視点から自閉的な価値観を示す点で『伊勢物語』のパロディになっているのに対し、『とよかげ』は、翁を登場させながらもあくまで日常世界の中で上衆を否定して下衆に仮託する人物像を描き、『伊勢物語』の男女の物語世界を「あはれ」なものとして捉えている。

第二章 『うつほ物語』の和歌と歌物語

第二章では、『源氏物語』以前の長編物語、すなわち長編物語創作の試行錯誤の時期に創作されたと考えられる『うつほ物語』に注目する。和歌や歌物語的な要素が、さまざまなかたちで物語に取り込まれ、長編物語の生成に活かされている様相を考察する。

第一節 実忠物語の長歌

『うつほ物語』の時代、長歌はすでに一般に詠まれることはなくなっていた。ところが、『うつほ物語』では、実忠物語に二首の長歌がある。亡児への追善願文の内容を表す、実忠の北の方の長歌と、それと類似する表現を用いながらもあて宮への思いを述べる、実忠の長歌であり、夫婦のすれ違いに焦点が当てられている。実忠は、あて宮求婚譚のリード役で、その結果としての家庭崩壊に物語の特色があるが、後に政界に復帰し、あて宮求婚譚と政治的な物語が統合されていく際に重要な位置を占める、独特な存在感がある。その造型に効果的に使用されたのが長歌などの和歌的表現である。

第二節 実忠物語の「かはらけ」に書かれた歌―歌物語の継承と発展―

物語の中で、宴席で「かはらけ」に和歌を書くことは、『伊勢物語』六十九段にも登場する設定である。周囲の人の目に触れないように特定の相手に歌を贈ることのできるこの型は、歌物語に特徴的な型の一つと見ることができ。『うつほ物語』のうちの二例は、実忠物語にある。「菊の宴」では、あて宮に夢中になるあまり山に籠ってしまった実忠を恋いつつ死んだ息子、真砂子君への思いを胸に、言い寄ってくる人々を避けて、実忠の北の方が娘の袖君とともに志賀の山本で暮らしているところに、実忠が仲忠とともに偶然立ち寄る。袖君は

円座に歌を書き、北の方は「かはらけ」に歌を書いて差し出す。しかし、実忠はそれが妻と娘であることに気づかず、歌によって夫婦の仲が元通りになることはない。が、その結末は「国譲・中」に持ち越され、周囲の人々のおかげで再会を果たすその場面でも、北の方が「かはらけ」に歌を書く。このように、短編的性格を持つ歌物語の型が、長編物語の生成に活かされている。

第三節 仲頼と妻の物語―「歌を持つ物語」へ―

『うつほ物語』の仲頼と妻の物語も、歌や歌物語の型を利用して創作されている。あて宮に心を奪われた仲頼は、最愛だった妻の歌に「あはれ」とは思うが、愛情が戻ることはない。「あはれ」は『竹取物語』や『伊勢物語』六十三段にも見える言葉だが、『とよかげ』や『源氏物語』の柏木の描写においては、さらに重要な意味を持つ言葉である。この点に注目すると、これは歌徳物語のような書き方でありながら、歌徳物語ではない。つまり、「歌物語」の型を使いながら、「歌を持つ物語」になってきていると言える。

第三章 平安後期物語と中世王朝物語における和歌の位置

『伊勢物語』の表現や和歌が『源氏物語』の成立に大きな影響を与えたことはすでに通説となっている。そこで、ここでは『源氏物語』以降の物語に注目する。第一節では『狭衣物語』をとりあげ、『伊勢物語』からの影響について検討し、特に、『伊勢物語』六十五段と源氏の宮物語との類似点に注目した。また、附節では、中世王朝物語の和歌に関する研究史を概観することで、和歌が物語の中でどのような役割を果たしているか、その一端を考察した。

第一節 『伊勢物語』「在原なりける男」と『狭衣物語』源氏の宮物語

『狭衣物語』は、独詠歌を多く持つなど、物語の和歌を考えるうえで興味深いテキストである。ここでは、源氏の宮物語が『伊勢物語』六十五段の表現を多用しながらも、「思ふ」「言ふ」歌の思いが相手に届かない物語となっている一方、他人に伝わらないことを前提としながらも思いを表出せざるを得ない「すさび」としての歌が心の「切実さ」を伝えるものとして描かれている。自らの心の質は伝わらなくとも、その深さや切実さは他人に伝わりと考える『狭衣物語』は、歌で思いを伝えようとする『伊勢物語』の思想を独自に捉え直したものと評価できる。

附節 中世王朝物語の和歌

一九九九年頃までの研究史を概括したうえで、『狭衣物語』の影響が強く見られる『あきぎり』を中心に、中世王朝物語における和歌の意義について見通しを述べた。和歌は、中世王朝物語においてはすでに形骸化していたが、物語の作り方に対するイメージやパターンが残っていたために存在しているという。それでもなお、和歌という形式が、再生産されていく王朝物語の構成要素として不可欠であったのは、独詠歌によって主人公の心情が示されるなど、歌の存在そのものが作者の関心のあり所を示す約束事として機能していたためと推測される。